

ジャワ島スラバヤからマレーを通過、仏印・西貢まで下士官以下八五名を列車輸送中、上級将校が単独で何名も同乗しているにもかかわらず、部隊を掌握しているものが長距離での命令を下達しなければならぬ苦勞も忘れることができない。

## スマトラ・タイ警備日誌

和歌山県 西畑 耕

昭和十四年四月、現役兵で和歌山の歩兵第六一連隊補充隊歩兵砲中隊に入隊、昭和十八年十月に宇品からスマトラに向け出発、スマトラ島の警備に従事し、終戦の年の一月タイに移動しました。

昭和二十年八月十五日にポツダム宣言を受諾、有史以来初めての敗戦の日を迎えました。翌二十一年六月十九日浦賀に上陸し、長いような短いような軍隊生活の終止符を打ちました。

入隊当時は緒戦の大勝の余韻もあり、初年兵教育に

も気合がかり、こんな訓練が激しいなら一日も早く外地へ行った方がよいなどとのんきなことを考えたこともありました。

今の若い人には想像もつかないでしょうが、往復ビンタ、対面ビンタ、長時間の腕立て伏せ、鶯の谷渡りなどなど想像を絶するような体罰がありました。

初年兵教育が終わり、十月に一等兵に進級しました。こうなればしめたものです。星一つの差は天と地の差です。テレビでよく見る入牢者の差別のようなものです。食事は上げ膳、据え膳、洗濯はいつの間にか初年兵がしてくれてくれる。一般世間とは全く異なった世界です。今考えると、いい習慣とは思いませんがね。

訓練と教育で一年経ち、第二歩兵砲小隊に編入になりました。

外地には戦闘が目的の部隊と、警備を主目的にする部隊があります。

昭和十八年十月九日宇品港を出帆、十一月四日にスマトラ島のペラワンに上陸しました。インドネシアは緒戦に英蘭軍を制圧してから戦闘らしい戦闘もなく、

またゲリラの跳梁もなく、したがって主なる任務は石油工場の警備と飛行場の陣地構築作業でした。

わが中隊は、タバヌリ州バリゲに到着し、事後十四カ月その周辺の警備をしていました。大隊主力はバタン飛行場地域に移駐して同地の陣地構築に従事していました。

昭和二十年の一月一日、上等兵に進級したときは嬉しかったですね。

一口に言えば内地勤務の延長のような感じですが、しかし、さすが夜の衛兵には緊張しました。日中、四〇度近くの気温が一〇度近くまで下がり、真つ暗闇の中で灯火がポツンポツンでしょう。夜空の美しさは今でも眼底にあります。そんなとき、内地でも両親が夜空を見ているのだなあと感傷にふけることがしばしばでした。

十一月二十日に大隊主力はバリゲ地区に復帰し、随時北部スマトラ及びメンタワイ方面に機動できるよう準備を指示されました。そのため自転車による機動部隊の編成、将校を長とする特別訓練隊を作り昼夜特訓

しました。また、長期駐屯に備えて農産物の耕作、簡易戦闘資材の製造など自給体制を確立しました。

第四師団は中部スマトラ防衛の任を解かれタイ国に転進を命ぜられました。第二大隊は一月二十八日バリゲを出発、一月二十三日東海岸州テロクニポンを出帆し、馬来のポートセッテンハムに上陸したのが一月三十日でした。三十一日に馬泰国境を通過し、二月六日、バンコック近郊ブラカノンに到着しました。

ビルマから師団に復帰した連隊長の指揮下に入り第二大隊を中心に一個連隊の再編が行われました。第二大隊を中心にスマトラ・ベマダンシャンタルにあった南方軍教育隊の精鋭兵員タイ国第七野戦補充隊から歴戦転属者を得てようやく編成が終わり、兵器その他の装備も整え、いよいよ軍旗を中心に連隊戦力の發揮のできる態勢ができてつありました。私はこの編成で第一歩兵砲小隊に編入になりました。

二月二十七日十五時五十五分から三十五分の間、B24約六十五機の空襲がありました。バンコック地方では初めて受ける大空襲で、対空戦備も十分でなく、隣

接する兵器廠、燃料廠の建物は次々と炎上し、集積されたドラム缶が空中に飛ぶのが目に見えました。

私はちようど週番下士官で「空襲、空襲」と連呼しましたが、実態は叫びながら火のない所へ火のない所へと逃げ回っていたのが実態でしょう。戦死者も戦傷者もごろごろしていたのを今でも思い出します。

後で聞いたことですが、軍旗を連隊本部から防空壕まで退避させるのに、結城連隊旗手、保田軍旗護衛小隊長は大分苦労したようです。

この爆撃で戦死した者八十七名、戦傷死二名、負傷者百数十名に及びました。うわさに聞いていましたが、彼我の兵力の隔絶、じゅうたん爆撃の惨状を身をもって体験しました。

それから定期的に敵の爆撃がありました。こちらはなす術もなく防空壕行きです。空射砲の弾丸はB24の機体にとどかず、邀撃する味方の飛行機がないのですから。

一方、ビルマから半死半生の将兵がバンコックの病院へ、そして仏印へ引揚げです。ああ、これで勝てる

のかなと口には出しませんが、心の中で思っていました。

そして、ついに迎えた八月十五日、三百万の戦死者を出し、対手側に二千万人の損害を与えた十五年戦争は何だったのだろうかと考えさせられます。

我々の子孫に二度とこの経験を味わわせたくないの思いでした。

九月三日陸軍兵長に進級。

昭和二十一年五月三十日バンコック出発、六月十九日浦賀入港。諸手続を終え、六月二十一日現役延期解除、除隊になりました。

無事、勝浦に帰り、蒼い海原を見たときは涙がとめどもなく出ました。